論文

親の会の特性と第三者の介入効果
Characteristics of Parent Peer Support Group and Effect of Third Party Intervention

長谷川 武史
名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科　講師

北 由香里
介護老人保健施設セージュ山の手

【要約】
本論文では、障害児をもつ親の子育て支援として、セルフ・ヘルプ・グループとしてのピアサポートについて、親の会の特性を踏まえた参加効果と、第三者の介入として専門職者やボランティアがどのような影響をおよぼすのかについて着目した。参加する保護者が、会への参加効果やそこへ関わる第三者の介入をどのように捉えているのかをインタビューデータを素材として考察した。結果、『会の有効性』『会の課題』『会の発展』という会の特性と、『専門職の役割』『ボランティア介入の印象』という第三者の介入効果を抽出することができた。特に課題として、当事者のみで会を運営することの困難さが参加者の特性変化に基づくものであること、専門職者の介入がそのような状況下での運営をサポートし社会資源としての質を向上させていることを見出した。また、ボランティアの存在は会の有効性を底上げする役割を担っていていると論じた。
キーワード　親の会、専門職効果、ボランティア効果

Ⅰはじめに

2015(H27)年度の厚生労働省「福祉行政報告例」によると、児童相談所における養護相談の件数は162,119件であり、その件数は年々増加している。養護相談の多くが虐待に関する相談であり、2015(H27)年度は養護相談のうち児童虐待相談の対応件数は103,286 件であった。児童虐待の特徴として、健常児にくらべ障害児が被虐待児となるケースが多いことがあげられており、障害児の虐待は主に家庭内で発生し、主たる虐待者は主たる養育者ともなっている母親であること(細川・本間2001)。障害児と過ごす時間が長いことから、物理的・精神的に大きな負担感を負っていることなどがあげられている (藤井・西出2011) (中下ら2012)。障害児を持つ親の育児負担感に関する研究では、障害児を育てる母親のストレスは、一般的な子育てのストレスに加え、障害受容、社会資源、将来への不安、父母間の育児方針、母親の就労状況など(新見・植村1985) (伊藤2006) (須田・坂田2006)と複数の要因が高いことも明らかになっている。

このような障害児をもつ親の子育て支援に関して、その効果に注目するのがソーシャルサポートとしてのセルフ・ヘルプ・グループや自助グループと呼ばれるピアサポートである。ソーシャルサポートの有効性はこれまでの様々な研究分野において明らかにされてきているが、その方法の1つである親の会などのピアサポートについてはその効果が研究されている反面(中根2002) (東村2006) (北川2008)、会員の減少や親の高齢化など、維持運営上の課題も報告されている(八峠・小林2014)。背景として、当事者のみで会を立ち上げることや運営していく事の困難さがあり、そこへ専門職者による適切な介入があることによってグループとしての組織化や円滑な継続が可能となるではないかと考えられる。親の会への第三者の介入効果については、医療機関内における看護職や医療ソーシャルワーカーなどの専門職によるものは明らかにされているが(前原ら2007)(井上2008)、地域内資源としての親の会へのそれを明らかにしたものはまだ少ない。

本研究の目的は、現在A市において活動している親の会である「X会」を対象に、会の特性を踏まえた参加効果と、第三者の介入として専門職者やボランティアがどのような影響をおよぼすのかについて明らかにすることである。

なお本研究のピアサポートの定義は、岡(1999)による、「セルフ・ヘルプ・グループとは、難病、摂食障害、レイプ被害、幼児突然死の苦しみ、育児上の悩みなどの同じ問題を共有する当事者たちが、自発的に集まってミーティングの場を設け、相互に支えあうグループのことである。」に準拠する。

Ⅱ方法

1. 調査対象

設立当時から現在までの活動を踏まえた会の効果や第三者の介入効果を明らかにするため、X会の創設に携わった親(2名)、創設後に参加した親(2名)の計4名とした。

2. 調査方法

調査対象者に対して個別の半構造化インタビューを実施した。インタビューは対象者の都合に配慮し、時間は60分程度、X会の活動場所として使用しているA市内会館の個室を使用

し、プライバシーに配慮した。調査は 2016(H28)年 8 月 16～21 日にかけて実施した。

(インタビュー項目)

①回答者基本属性

②子の基本属性

③X 会の発足について/参加経緯について

③X 会参加の効果・影響について

④今後の親の会の推進について

3. 倫理的配慮

研究の趣旨・内容・倫理事項などを口頭および、文書で説明し書面で同意を得た。研究は自由意思のもとで行い協力は断ることもできること。協力した場合でも途中で中断、延期することができること。不参加や途中中断した場合でも、対象者の不利益になることは一切ないこと。個人情報の保護に十分配慮し、プライバシーを守ることを説明した。

後日、調査協力の同意が得られた対象者と日程を調整し、調査を実施した。インタビュー中の録音と記録に関する同意を得た上で IC レコーダーとメモを用いて記録を取った。得られたデータは、元の音声データおよび分析に使用したメモや書類を含め、研究室にて鍵のかかる書棚にて管理。得られたデータに基づく事例の紹介等においては、対象者の個人が特定されることのないように処理を行った。音声データは研究終了後速やかにデータを消去、インタビュー時の手書きメモも同様に研究終了後速やかに裁断して破棄した。なお、インタビュー調査に関する倫理的配慮については、名寄市立大学倫理委員会(受付番号 16-020)の承認を得て実施した。

4. 分析方法

インタビューで得られた音声データを元に逐語録を作成し、SCAT(Steps for Coding and Theorization)によって分析した。SCAT は、大谷(2007)が開発した質的データを得るための分析手法である。観察記録や面接記録などの言語データをセグメント化し、そのそれぞれに、①データの中の着目すべき語句、②それを言いかえるためのデータ外の語句、③それを説明するための語句、④そこから浮き上がるテーマ・構成概念 の順にコードを考案して付していく 4 ステップのコーディングと、そのテーマや構成概念を紡いでストーリーラインと理論を記述する手続きから構成される。

5. X 会の基本的特徴

調査を行った A 市の親の会(X 会)は創設 6 年目を迎え、現在 12 家族が所属している。活動は月一回、定例として A 市内の社会資源を利用しての交流、会員間の情報交換を行うほか、年に数回野外活動などのイベントを企画している。専門職者として 1 名の社会福祉士が運営に関わっており、参加者からの求めに応じて運営補助などの支援を行っている。また A 市近郊の大学生がボランティアとして毎回 2～5 名ほど参加して、親同士の交流中の子どもの見守り活動を行っている。

Ⅲ結果

１．データの概念化

抽出されたテーマ、カテゴリー、サブカテゴリーは表 1 の通りである。以下、X 会参加者の語りの分析結果を、これらを使って記述する(テーマは『 』、テーマ内の分類は「 」、カテゴリーは【 】、カテゴリー内の分類は〈 〉、サブカテゴリーは［ ］で囲んで示した。)

表1　データからの概念化

テーマ		カテゴリー	サブカテゴリー
入会の動機		子の療育不安・苦悩(親の利益)	必要な社会資源の喪失 A市内小学校への入学拒否 子の障害への無理解
		子の利益	子の参加意欲優先 学校での居場所喪失
X会の有効性	親	ピアサポート機能	心情の共有・共感 体験談の教示 情報共有
		ネットワーク形成機能	親同士の交友関係の広がり
		居場所機能	孤立感の解消
		社会資源活用の促進	自らの意向再認識 決断の後押し
	子	居場所機能	障害児交流 健常児きょうだいの交流 他学校児童との交流 失敗の受容 信頼のおける相手の獲得
		社会性向上機能	障害児交流による成長の場
X会の課題		入会の困難性	固定的、閉鎖的な会の雰囲気 低頻度の活動 不十分な情報提供 人間関係形成の主観的抵抗感
		子の活動内容(凝集性の 低い遊び)への不満	子のニーズの変化 社会性向上の妨げ 外部の人間にとって有効性が感じにくい
		青年期の子をもつ(子の年齢が高い)親へのピアサポート機能強化	常に情報提供者としての立場 ニーズ変化への対応 外部講師の導入
		役員中心	過重負担(企画・運営) 会員の意見が反映されにくい 負担分散
		活動頻度の増加	参加への自由度の高さ

X会の発展		発展への阻害要素		価値観やニーズの多様化による意思統一の困難 子の年齢、障害特性の差異 会員の固定化
		発展させたい理由	内部	会の変化を求める 退会後も交友関係の継続を望む
			新規会員	ネットワークの広がり 状況に適した助言
			地域	社会資源(X会)活用によって障害受容を促す 情報の蓄積による若い世代へのニーズ対応
			共通	障害児とその親のニーズは今後も継続する
		発展に必要な要素		新規会員獲得 入会の容易さ 開放型の活動 活動内容の変容(内部へのニーズ対応・外部への印象)
専門職者の役割	内部	活動維持		意見集約 苦情処理
		情報提供		他機関の情報提供
		相談		子の自主的な相談
	外部	信頼性の保障		窓口業務
ボランティア介入の印象	親	レスパイト機能強化		親の自由時間の増加 育児からの一時的解放
	子	社会性向上機能強化		自発的な発言の促進 凝集性の高い遊びの提供 社会経験、成功体験の獲得
		居場所機能強化		X会内での子の孤立への不安解消

X 会参加者の語りは、大きく『入会の動機』『X 会の有効性』『X 会の課題』『会の継続性』『専門職者の役割』『ボランティア介入の印象』の 6 つのテーマで構成されている。以下に、6 つのテーマごとのデータの分析結果を述べる。

(１)入会の動機

X 会への『入会の動機』は、【子の療育不安・苦悩(親自身の利益)】、【子の利益】の 2 つのカテゴリーで構成されている。

【子の療育不安・苦悩(親自身の利益)】は、[必要な社会資源の喪失]や[A 市内小学校への入学拒否]、[子の障害への無理解]などといった子の障害に起因した社会的孤立感排除のために入会に至るケース。【子の利益】では、[子の参加意欲優先]や[学校での居場所喪失]といった親自身はサポートを必要としていない場合であっても、子の想いや状況を優先させて入会に至るケースが語られた。

(２)X 会の有効性

『X 会の有効性』は「親にとっての有効性」と「子にとっての有効性」から構成されている。前者は、【ピアサポート機能】、【ネットワーク形成機能】、【居場所機能】、【社会資源活用の促進】の 4 つのカテゴリーで構成されており、後者は、【居場所機能】、【社会性向上機

能】の 2 つのカテゴリーで構成されている。

「親にとっての有効性」としての【ピアサポート機能】は、[心情の共有・共感]、[体験談の教示]、[情報共有]といった障害児をもつ親同士という近い境遇だからこそ打ち明けられること、その場の話題として参考となることが多いことが有効性として語られた。【ネットワーク形成機能】では、日常生活では難しい[親同士の交友関係の広がり]形成が可能となっていること。【居場所機能】では、会に参加することによって[孤立感の解消]が行われたこと。【社会資源活用の促進】では、会員同士の支え合いであるピアサポートにより[自らの意向再確認]や子の療育や生活に関する[決断の後押し]がなされ、既存の社会資源の有効活用へと結びついていた。

「子にとっての有効性」としての【居場所機能】は、[障害児交流]、[健常児きょうだいの交流]、[他学校児童との交流]、[失敗の受容]、[信頼の置ける相手の獲得]の 5 つがあり、教育機関以外での交流の場、子どもがありのままの自分でいることができる環境として会が存在していた。【社会性向上機能】としては、[障害児交流による成長の場]があげられた。

(３)X 会の課題

『X 会の課題』は、【入会の困難性】、【子の活動内容への不満】、【青年期(子の年齢が高い)親へのピアサポート機能強化】、【役員中心】、【活動頻度の増加】の 5 つのカテゴリーで構成されている。

【入会の困難性】は、[固定的、閉鎖的な会の雰囲気]や[人間関係形成への主観的抵抗感]など、対象者自身の入会時の困難体験があげられていた。【子の活動内容への不満】に関しては、ボランティアが介入しない場合、現在 X 会の活動の主流がビデオゲームなどの凝集性の低い遊びとなっており、[子のニーズの変化]から不適切であると感じることや、[社会性向上の妨げ]となることを心配していることが語られた。【青年期の子をもつ(子の年齢が高い)親へのピアサポート機能強化】では、経験の長い親が他の参加者に対して[常に情報提供者としての立場]であること、逆に自分が現在あるいは今後経験する問題や課題に対する経験者がいない場合が多く、子の成長に伴う[ニーズ変化への対応]が会の中では十分行えないことが課題としてあげられた。現在はその改善策として[外部講師の導入]などを図り、会員よりも上の世代の親からの体験談を教示できる場を設けていた。【役員中心】では、毎月の企画・運営を数名で行っていることから一部の会員への[過重負担]が懸念されているため、最近では[負担分散]としてイベントごとの担当を決め役割分担を試みていた。また、[会員の意見が反映されにくい]という点も課題の一つであった。【活動頻度の増加】では、実施回数が少ない現状において、他の生活上の都合よりも会へ参加することを優先せざるを得ない状況が語られており[参加への自由度の高さ]が求められていた。

(４)会の発展

『会の発展』は【発展への阻害要素】、【発展させたい理由】、【発展に必要な要素】の 3 つのカテゴリーで構成されている。

【発展への阻害要素】としては、子の成長や生活環境の変化による[価値観やニーズの多様化による意思統一の困難性]、[子の年齢、障害特性の差異]、新規会員が少ない現状にある[会員の固定化]があげられた。【発展させたい理由】は〈内部〉、〈新規会員〉、〈地域〉、〈共

通〉で構成されており、〈内部〉での理由としては[会の変化を求める]、[退会後も交友関係の継続を望む]というものであった。〈新規会員〉にとっては、[ネットワークの広がり]、[状況に適した助言]など現在持ち合わせていない社会資源や情報を得ることの有効性が語られた。〈地域〉では、地域全体が[社会資源(X 会)活用によって障害受容を促す]、会が地域内に存在することで[情報の蓄積による若い世代へのニーズ対応]が可能となること。〈共通〉では[障害児とその親のニーズは今後も継続すること]と、対象者それぞれが会の有効性を知覚しており、会を発展させることにより、現在の会員あるいは今後入会する可能性のある人、地域それぞれにとっての有益となることを期待していた。【発展に必要な要素】としては、[新規会員の入会]やそのための[入会の容易さ]、[開放型の活動]、[活動内容の変容]が現在の X 会に求められていた。

(５)専門職者の役割

『専門職者の役割』は、「内部」と「外部」で構成され、前者は【活動維持】、【情報提供】、【相談】の 3 つのカテゴリーで構成され、後者は【信頼性の保障】というカテゴリーで構成されている。

「内部」における【活動維持】では、会員の[意見集約]や[苦情処理]を専門職者が行うことで、会の適切に運営されていることが語られた。【情報提供】では、親に対する[他機関の情報提供]が行われることで問題解決されること。【相談】では、[子の自主的な相談]が可能になっていることに専門職者の存在意義を見出していた。「外部」における【信頼性の保証】では、専門職者が会として地域との[窓口業務]を担うことで新規入会者と繋がることができるなど外部への信頼や安心感につながっていることがあげられた。

(６)ボランティア介入の印象

『ボランティア介入の印象』は、「親」と「子」それぞれで異なり、前者は【レスパイト機能強化】、後者は【社会性向上機能の強化】【居場所機能の強化】の 2 つのカテゴリーで構成されている。

「親」への【レスパイト機能強化】では、ボランティアの介入により[親の自由時間の増加]、[育児からの一時的開放]が可能となり、結果としてピアサポート機能の向上を期待されていた。

「子」への【社会性向上機能強化】では、会内での[子の自発的な発言の促進]や[凝集性の高い遊びによる成功体験]、[社会経験の場の提供]などと社会性向上のサポート機能があげられた。【居場所機能強化】としては、[X 会内での子の孤立への不安解消]として、遊びの輪に入ることが難しい子へのサポート機能があげられた。

２．データの分析結果

インタビュー調査の分析結果から、X 会入会の動機に関して、子の障害に起因した不安や苦悩、あるいは子の学校での居場所喪失などと何らかのニーズが生じた際に入会に至っている 。以降、分析に関連するインタビュー内のテキストを囲み線(□)で示す(テキスト内(　)は筆者による補足)。

先輩の子たちが中学校行ったりだとか、高校行ったりだとかってそういう過程でやっぱりいろんなことがあるから、そういうのを教えてもらえるっていうのは勉強になるし、そういう心構えでいようっていう気にもなってくるし、その先々のことが計画立てて考えられるので、すごくいいなって思う。その時感じたこととかも、お母さん同士だと話しやすい。

子どもがだんだん大きくなるにつれて、やっぱり差が出てくるんだよね。みんながちょっと違うのかなって思い出して、本人もなかなか思うように体も動かないなーとか勉強ができないなーっていうふうに分かり出したぐらいの時から友達がいない、その子にね。

失敗して学ぶことってすごい多いと思うんだけど、やっぱりなかなか。でもここ(X 会)だと、別に失敗してもいいんだよっていう感じできっとみんなも見てるし、思ってくれてるから、そういうのはなんかいつもの自分は出しやすいのかなって思いながら。

しかし、X会創設から 6 年が経過し、子の成長に伴う参加する親の環境や心境の変化がニーズを変化させていること、さらに会の規模が拡大していることが、新規入会の困難性や入会時とは異なるニーズがその後発生している。その課題への対策として外部講師を招くなど、会員のニーズ充足を図ろうとしていることが抽出された。

一括りに肢体不自由児とか脳障害児とかって括ってもやっぱりそれぞれで違うから、一人ずつね、悩みが違ってくるから。その中で話をしても「じゃあこうしたらいいね」って言ってくれる先輩みたいな感じが今の少人数だとやっぱりいなくて、そういうところが足りないところかなとは思う。だからきっと今一番上の子どもたちももっと先輩お母さんの話が聞けるといのかなって。

創立して何年も経つから、結構みんな仲いい感じで固まっちゃって出来上がってるから関係が、なかなか入りづらいかなーっていうのはあったかな。

悩みの質が変わってしまったので、共有できなくなっちゃうと... 楽しめないよね。

会としての課題だけではなく、個人の課題解決にも有効であると知覚されていたのが専門職者やボランティアなどの第三者の介入であった。専門職者の役割としては会員の意見集約や苦情処理、意見の代弁による会の円滑な活動をサポートすること、必要に合わせて他の社会資源へ結び付けるなどがある。

活動に関してはやっぱり一番心強いですね。場所とか、みんなの意見を取りまとめるとか、内部で出てくる不平不満をそっと平らにしていく係だったりとか、会のメンバーではない、そういう資格を持ったきちんとした人が関わってくれるっていうのは、会を正常に運営していくのに欠かせないと思いましたね。

ずっと気持ちを押し殺してたけど、あの想いを言ってみようって。こういうことがあって、私はこう思ってるんだけど、もうちょっとこうしてほしい。だけど私が言ったことにしないで専門職者の意見として出してもらう。そういうのは大事。

お母さんじゃない他の第三者(専門職者)がきちんと窓口にいてくれるのってちょっと安心しません？なんかちゃんとやってくれそう。会としてやってるんだなって思いますよね。

他のデイサービスも使ってるから、ここが相談支援の窓口になってて、子どももそこ(X会に関わる専門職者)だったら話しやすいからって自分でこう行くから、そういうつながりになってよかったなー。

ボランティアはその介入によって、親の会参加によって得られる効果を底上げしている。

凝集性の高い遊びの提供や、子ども特性に応じた関わりにより、子どもの発言や行動が促され、それが各自の成長に繋がっている。

月に一回 X 会で話し合える場がすごく良くて、そうすると親は子どもから手を放したいわけじゃない。なので学生さん(ボランティア)が来ると子どもたちと遊んでもらえるから、お母さんがフリーになる時間が増えるからお母さんにとってもすごく良い。

学生さん(ボランティア)が相手してくれることによってあぶれてる子も X 会に来るの楽しいのかなって。あんまり一人でいる時間が長いと X 会に来たくないってなっちゃうんじゃないかなって心配とかちょっとあったんですけど、前は。でも学生さん(ボランティア)が来てからはそういう心配事もなくなって、すごい助かってます。

みんなの前で意見するっていうこともなかなかね学校では恥ずかしかったり、言ったらみんなに変なふうに思われるとか言えなかったりとかもあるから、なんか「はい」って元気に手をあげて発言してたりすると、「あっ、なんかすごくいいなー」っていうふうには見てます。

(ボランティアの参加が)新鮮な感じで子どもたちが人見知りをしないようになっていくことがいいなと思ってて。

現在の X 会の維持継続を阻害する要素として、子の成長や障害特性、ニーズの多様化などいくつかあげられたが、親は自らの経験から会の有効性を実感し、会内部に限らず地域においてサポートを必要としている障害児をもつ親に広く周知を行い、会を継続させていくことを望んでいた。また、会の維持継続に必要な要素として、新規会員の獲得やそのための入会への敷居を下げることなど、活動内容の変容が求められていた。

最近は会の方向性がまとまらなくなってきているから、お互いに衝突したりもあるし、重度の子、軽度の子で求めるカリキュラムが違うからやっぱりズレていくんだよね、ちょ

っとずつ。

私としては、情報共有とか交友関係とかそういうのを目的として入ったんで、次の人のためにも続けてほしいなっていうふうに思っています。体験談を聞いたり、相談できる場って限られるので、そういう場として幅広い人が入ってくれた方が悩み解決とかそういうのにつながるんじゃないかなって思ったりはしますね。

(月に)一回しかなかったらその日に用事が入ってたら来れなくって、だから二回とかあって、行けれる人だけ行くっていう、なんか必ず来なきゃだめっていうふうになっちゃうとちょっとみんなしんどくなっちゃうから...

どうしても閉鎖的な感じで、きっとあるのは知ってるけど、一人じゃ行かないよねっていうところだし、なんかそういうイベントみたいなこう誰でも来れるような感じがあると、X 会っていうのがもうちょっとみんなに分かってもらえるのかなって。で、近所のおじちゃんとかおばちゃんがこういうのがあるから行ってみたらいいんじゃないっていうふうな感じで広まってくのが一番いいのかな。

３．考察

今回の研究では、『X 会の有効性』『X 会の課題』『X 会の発展』という X 会の特性と、『専門職の役割』『ボランティア介入の印象』という第三者の介入効果を抽出することができた。以下に、その 2 点に分けて考察をする。

(１)X 会の特性

親の会のようなセルフ・ヘルプ・グループは、共通の問題を抱えた人々が力を獲得していく場として誕生し、自らの悩みや不安を解消する場としての存在意義が示されている(八峠,小林 前掲)。本研究の分析においても、親の会の特性として同様の経緯が見られる。参加する親が知覚する会の有効性としては、悩みや不安の解消、共感といったピアサポート機能が大きい結果となった。先行研究においては、司会者となる専門職者と経験の長い親が、参加者の語りを促進するとしていた(北川 前掲)が、X 会には明確な司会者は存在しないものの、経験の長い参加者の助言によって、他の参加者のエンパワーメントが促進され、新たな社会資源活用へと結びついていた語りもあり、当事者のみの関係性においても一定のピアサポート機能が存在していた。

しかし、会員の固定化や閉鎖的な印象による新規参加の困難さ、子の年齢や障害特性によりニーズが少数派となってしまう親へのピアサポート機能が不十分になるという課題が生じている。東村(前掲)が、障害をもつ子どもの親同士だからといって、決して常に分かり合えるわけではないと指摘しているように、本研究においても、類似した障害であっても親が抱く悩みはそれぞれ違うこと、障害の程度や子どもの成長によっても求めるものが変化すること、子どもの障害に対する捉え方が親によって異なり意見が対立すること、経験が長い親にとっては自分自身の今後の不安を解決することが難しいことなどが明らかとなった。

グループをシステムとして捉えると、グループメンバー個々人の変化がグループ全体にも影響を及ぼしその相互作用の結果、グループが変化または成長していく。グループの参加者が固定化し凝集性が高まることで、メンバー間の結束や目的効果を高めていくことに繋がる。しかし、前述しているように参加者のニーズは固定的ではなく変化が伴うものである。X 会においても個々人の変化や関係性が影響し、意思統一が困難になるなど今後の会運営に関する課題が確認できた。会の特性として、多様な価値観やニーズがあることから会全体での統一された意思決定は行えないため、一部にニーズ充足が難しくなってきている参加者が存在している。参加背景とそれに基づく会への参加目的に対するピアサポート機能を、どのように展開していくかの検討が今後重要になると考えられる。

また参加する親は、会を発展させることが現在 X 会に所属している会員自身、今後入会の可能性がある者、地域、それぞれへの利益となると捉えていることが明らかとなった。会の発展には新規会員の獲得が必要不可欠であり、会員が増加し、会の規模が拡大することにより情報が蓄積され、より参加者それぞれに適した参加効果を受けることが可能となる。しかし、活動に対する意向の不一致やニーズの不一致、参加期間の差異による会に対する想いの違いから運営上の課題も想定される。

親の会というセルフ・ヘルプ・グループの特性として、グループ結成時の主眼的なニーズは不変的なものではなく、子の成長に伴う生活環境の変化によって、参加する親のニーズは変化していくものであること。関連して、参加する子の年齢層によって、少数となる年齢層の子やその親にとっては、会に期待するニーズ充足が果たされない可能性があることが明らかとなった。

そこで重要となるのが専門職者やボランティアによる関わりである。参加者および会全体の状況を把握し、必要に応じた助言やサポートができる第三者の存在である。

(２)第三者の介入効果

井上(前掲)は親の会への専門職の役割として、各分野の専門職別に役割を示している。医師の立場では会員の紹介、運営に関するアドバイス、医学情報の提供。カウンセラーでは、運営に関わるファシリテーターの役割。保健師では関係機関の連携を図ること。さらに看護職では、親の会の特徴を充分理解し、会に適応した関わり方を常に模索していくスタンスが重要であるとしている。専門とする分野は異なるが、X 会に関わる社会福祉士の役割も、運営に関するアドバイスや関係機関の連携といった点が類似していた。本研究ではその他にも、専門職者が会員間の苦情処理や意見の代弁といった社会福祉士の基本的な専門性を元にしたサポートを行っていることが明らかとなった。北川(前掲)が、場合によっては専門職がファシリテーターとなり会員の発言を引き出し、各自が想いを打ち明けられる環境を整えることも重要であると述べているように、グループに対する参加者のニーズが時間とともに変化し、様々な考えが出てくる当事者主体のグループにおいては、専門職を適時活用することがグループの運営維持に効果的に作用することが本研究でも示された。

また、先行研究では内部の利益となるよう働きかけることが役割として示されていたが、本研究ではその内部の関わりが、地域に対する活動の信頼性を保障することに繋がり、地域内の社会資源として、その質を担保することにつながっていた。

セルフ・ヘルプ・グループにおけるボランティアの介入効果については、篠崎ら(2000)

が、親自身には親同士の交流や情報交換の機会、息抜きができる場、安心できる場になること、子にとっては健常児の兄弟姉妹も交えた遊びが可能となる環境に安心感を抱くことを明らかにしている。X 会では、当初より交流や情報交換の機会はボランティア介入前から得られていたが、ボランティア介入後は、参加中の親の自由時間の増加、育児からの一時的解放といったレスパイト機能が強化され、親同士のピアサポート機能をさらに向上させていると考えられる。

さらに子へのサポート機能として、学習態度や能力面での向上(篠崎ら前掲)、ソーシャルスキル向上、楽しい活動のバリエーションを増やす場(田中ら 2012）となることが明らかにされており、本研究においても凝集性の高い遊びの提供や活動のバリエーションを増やすといったボランティアの介入から、子の自発的な発言の促進や社会経験や成功体験が獲得され、ソーシャルスキル向上につながっていることが明らかとなった。

Ⅳおわりに

本研究では、親の会参加の有効性が明らかとなった一方で、会が抱える課題も把握することができた。分析結果からは、当事者のみで会を運営することの困難さがあり、専門職者の介入が会の運営をサポートし社会資源としての質を向上させていることが明らかとなった。また、ボランティアの存在は会の有効性を向上させる役割を担っていていることが明らかとなった。

会に参加する当初の目的が子の成長に合わせて変化し、会の捉え方も変化する。その変化を肯定的に捉える人もいれば否定的に捉える人もいる。そこに当事者組織としての運営上の難しさがあり、発展を阻害していると考える。専門職者やボランティアなどの第三者は、会の特性変化に合わせたサポートを検討していくことが求められるだろう。

インタビュー対象者の言葉の中に**「こういうところ(X 会)に来れるお母さんって一個乗り越えたお母さんが多いから、そこに至らないお母さんは今頃お家でもしかしたら子どもを殴ってるかもしれない、と思うとちょっといたたまれないよね。そういうお母さんに知ってもらえたらな。」**という子の障害受容に至っていな親へのメッセージが込められていた。障害児、子の養育に悩み苦しむ親の存在は今後もなくなることはないだろう。早期に適切なサポートや社会資源に結びつくことによって障害の受容が促進され、養育負担感の軽減や、子の QOL 向上が期待できる。しかし、障害受容に至っていない親は社会とのつながりを持つことに消極的である場合もあり、この点からも本研究で取りあげた親の会のようなピアサポート機能を地域内で周知していく重要性がある。

謝辞：インタビュー調査に協力してくださった X 会参加者の皆様に心から感謝申し上げます。

参考文献

・厚生労働省「平成 27 年度福祉行政報告例」2016-12-14
http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/gyousei/15/index.html(2017/1 アクセス)
・細川徹,本間博彰「わが国における障害児虐待の実態とその特徴」『平成 13 年度厚生科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）「乳幼児期の虐待防止および育児不安の母親の

支援を目的とした母子保健に関する研究」分担研究報告書』382-390, 2002
・藤井容子,西出和彦「知的障がい児の地域資源活用のあり方に関する事例研究」『日本建築学会北陸支部研究報告集』(54), 327-330, 2011-07-10
・中下富子,宮崎有紀子,上原美子,大野絢子,鎌田尚子「知的障害児の家族のストレスとニーズ,ソーシャルサポートとその関連性 : 知的障害特別支援学校児童生徒の家族への質問紙調査に基づいて」『日本地域看護学会誌』 14(2), 101-112, 2012-03-31
・新見明夫,植村勝彦(1984)「学齢期心身障害児をもつ父母のストレス : ストレスの構造」『特殊教育学研究』 22(2), 1-12, 1984-09-30
・伊藤由美「母親のストレスへの支援に対する現状と課題．障害乳幼児を抱えて就　　労している保護者に対する地域の特色を生かした教育的サポート」『平成15-17年度科学研究費補助金 研究成果報告書』1-7, 2006
・須田真侑子,坂田周一「障害児の母親に対する支援」『立教大学コミュニティ福祉学部紀要』8, 101-108, 2006-03-15
・中根成寿「「障害をもつ子の親」という視座―家族支援はいかにして成立するか―」『立命館産業社会論集』38(1), 139-164, 2002-06
・東村知子「障害をもつ子どもの親によるピアサポート」『ジャーナル「集団力学」』 23(0), 69-80, 2006
・北川かほる「障害児・者の母親にエンパワーメントをもたらす交流会の進行」『家族看護学研究』14(1), 48-57, 2008
・八峠なつみ,小林勝年「セルフヘルプ・グループとしての発達障害児を持つ母親の会―フォーカス・グループインタビュー調査をもとに―」『教育研究論集』(4), 11-21, 2014
・井上玲子「親の会に関する国内文献の検討」『日本小児看護学会誌』17(2), 59-65, 2008-09-20
・岡知史『セルフ・ヘルプ・グループ　わかちあい・ひとりだち・ときはなち』星和書店, 1999-02
・大谷尚「４ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案―着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き―」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』54(2), 27-44,2007
・前原邦江,大月恵理子,林ひろみ,井出成美,佐藤奈保,小澤治美,佐藤紀子,荒木暁子,石井邦子,森恵美「乳児をもつ家族への育児支援プログラムの開発 - 出産後1～3か月の母子を対象とした家族支援プログラムの評価」『千葉看護学会会誌』 13(2), 10-18, 2007-12-30
・篠崎久五,一門惠子,服部陵子,鳥岡信孝,河田将一,天津透彦「熊本の自閉症児療育学生ボランティア活動の歩み」『別府大学紀要』42,171-182, 2000
・田中里実・橋本創一・鈴木みのり・山田真幸・霜田浩信・斉藤理恵子「発達障害児の親の会における SST を重視した余暇支援活動：専門家の助言と学生ボランティアの導入による支援」『東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要』8,17‐22, 2012